

編輯室の内外

本誌が道路行政と道路技術に關する専門智識の普及と之を通俗化することに力めて居て、其の最終的目的とする所は我國道路の改良に在るのであるが、近時本會の行動

を政治的に觀察するものが渺くないのは編輯子の頗る遺憾とする所である、併しながら道路を改良すること夫れ自身に就ては政黨政派の如何を問はず何人も異論のあるべき筋合のものでない、又本會の幹部連にしても政黨に關係ある人もあるが亦何等關係を有して居ない人も渺くは無い、假令是に關係ある人に対して憲政會、政友會、本黨と言ふやうに現下政黨の全部を網羅して居るのであつて「黨一派に偏倚して居るのでない、幹部連が政黨關係を超越し其の目

的である事業も亦同一であるのに、強て之を政黨的色彩を以て觀るのは觀る人の眼が既に政黨膜にかゝつて居るのである、強て辨明的言辭を弄す必要もないが、多數讀者の内一人でも此捏造的宣傳に誤られるやうなことがあつては一大事と懸念して茲に附言して置く。

本誌に登載した前内務省土木局長、今の社會局長官長岡隆一郎閣下の「道路工事の執行に就て」の講演は本會の催した道路職員講習會で述べられた講演概要である、當時氏の校閥を得てモー少し早く登載するのであつたが、校閥を受けた原稿を編輯子が失つて終つて再度の校閻を願ふ勇氣がなかつた、何れ叱咤を受くることを覺悟して再度の校閻を願つたら、既往を咎めない氏は快諾されて今日本誌に發表するのである。

其の所見紙背に徹するの感あるは、誰かゞ

言つた通り、流石は監察院殿辛辣居士の名に背かない、自治團體監督の任に在る者は既に精讀することに依つて、其の監督の任を完ふすることを得べく、監督を受くる者は工事の執行に就て注意すべき點を發見するであらう謹で閣下に敬意を表して置く。

本誌道路技術の爲に編輯に力めて居た、七郎三浦君が一年の歐米視察を了へて春洋丸で本月末横濱に着くことに爲つた、是から同君が彼の地で觀察したことやら研究したことなどを本誌に連載する筈である、歸朝した月の十一月號から筆を探し度いのであるが、一ヶ月の獨身旅行に同情して佐賀の郷に夫君を待ち侘びて居る妻君と一月間は休養せしめてやり度いので十二月號から法螺を吹くから暫時猶豫して貰ひたい(た)